校長室だより
NO.　５４
令和２年３月２日

すべては光る

梅園小学校長
たか　す　りょうへい
高　須　亮　平

絵本『木を植えた男』から人間の持つ力の素晴らしさ、美しさを学ぶ

２月下旬、校内放送で、これまで育ててきた学校の樹木の苗を配付することを伝えたところ、多くの子どもたちがレジ袋を持って取りに来てくれました。そして、次の樹木の苗を配付しました。

○　くすくん（クスノキ）　　○　梅
○　カエちゃん（イロハカエデ）　　○　イチョウ
○　ガウス君（センダン）

学校の樹木の苗

多くの子どもたちが学校の樹木に興味を持ってくれることはうれしい半分、持ち帰った後、家庭では困ってはいないか少し心配になりました。育て方は、庭に植えても少し大きめの植木鉢でも、水をやれば育てられます。大切に育てて、何年かして、小学校の頃を思い出してくれると最高です。

さて、樹木を植えて育てると言いますと、思い出す本があります。今回は、木を植えることから、粘り強く無私な行為の続ける素晴らしさに触れる絵本を紹介したいと思います。その本と言いますと、絵本『木を植えた男』（ジャン・ジオ原作、フレデリック・バック絵、あすなろ書房）です。まず、あらすじは次のようです。

絵本「木を植えた男」の表紙

この本は、昔、登場人物である「私」（ジャン・レオ）が行ったフランスのプロバンス地方の山奥のお話です。そこは海抜1300ｍほどで、生えているものは何もない全くの荒れ地でした。私は広い荒野を３日歩き続けてどこかで水を探しました。でもそこは日差しが強く強風が吹いていましたので、私はキャンプを張るのをあきらめました。それから５時間ほど歩き続け、はるか彼方に黒い影を見つけて、その影に向かって歩いていきました。それは羊飼いと羊たちでした。

その羊飼いの男は、私に水をくれ、羊小屋に連れて来てくれました。羊飼いの男は石造りの手入れが行き届いた家に住み、温かいスープをごちそうしてくれました。私は、その夜、羊飼いの家に泊めてもらいました。そのあたりの村々の人は木こりや炭焼きをしていましたが、冬も夏も気候は厳しく生活は苦しかったのです。村人の心はすさみ争い事が絶えませんでした。そして、自殺や心の病も流行っていました。その夜、羊飼いの男は、袋に入ったたくさんのどんぐりをより分け始め、大きくて形の良い100個のどんぐりを選び、その晩は床に就きました。

次の日、私は、もっとその羊飼いのことが知りたくなりました。羊飼いは水に浸したどんぐりの袋と、長い鉄の棒を持って山に行き、棒で穴を開け、そこにどんぐりを植え始めました。聞けば、彼が植えた10万個のどんぐりは、その２万個が芽を出しましたが、その半分は動物にやられるか何かでダメになるということでした。羊飼いは、他にもブナの木やカバの木を育てる実験をしていました。そして、その翌日、私は山を下りました。

その翌年から戦争が始まり、私は５年を戦場で暮らしました。私は、戦場から戻ると新鮮な空気が吸いたくなり、またあの荒れ果てた地に向かいました。すると、廃墟の村まで来ると、遠くに何かがじゅうたんのようにな

びいていました。「もしかして、１万本のカシワの木があんなに根付いたのかもしれない」

やはり羊飼いの男はまだ生きていて、木を植え続けていました。カシワは私の背丈を超え、カバの木もブナの木も立派に育っていました。それに加え、以前は干上がっていた小川に水が流れていました。それから私は毎年、その羊飼いの男を訪ねました。やがて、風が種をまき散らし、小さな牧場や花畑が次々に生まれていきました。この豊かに育った木々を見て、誰も一人の男が作り上げたと思いも及ばないほどとなりました。

それから、１万本植えたカエデが全滅するなどのことがありましたが、それでも羊飼いの男は不屈の精神で、一人で木を植え続けました。そして、やがてこの地は国の保護区に指定されました。そのころ２度目の戦争が起こり、木炭が必要になりましたが、この地は車も入れないため伐採は免れました。しかし、そんなことも知らず、羊飼いは木を植え続けました。

２度目の戦争が終わり、私がまた山へ行ってみると、村には噴水ができて、菩提樹が植えられ、耕地が作られ、人々は未来への夢と労働への意欲がみなぎっていました。たった一人の男が、荒れ果てた地を、幸せが満ちる地へと生まれ変わらせたのでした。

このお話は、目に見えることだけに支配されないことと、続けることの大切さを物語っています。人というのは、今の目先のことを考えて行動したり、自分が一番よい立場になれるように物事を進めたり決めたりすることがあります。そして、自分の行った結果はすぐに自分に返ってくると思ってしまうものです。しかし、この羊飼いの男は、誰のためというわけでもなく、たぶん自分のためでもなく、ただそうすることで、木が育てばよいと思い木を植え続けました。羊飼いの男の行為はすぐに結果が出るものではなく、何十年先、何百年先、もしかしたら結果が出ないかもしれません。

ほとんどの人が、自分がいなくなった後のことなんて、どうでもいいと思ってしまうでしょう。しかし、あからさまに自分がいなくなった後はどうでもいいとは言いませんが、未来の見えない成果のために労力を提供できる人は多くはないでしょう。そのため、未来のために木を植え続けたこの羊飼いの行為はすばらしいと思います。がんばったらその分、目に見えて成果が出れば、そのことが「もう少しがんばって続けよう」というモチベーションにつながります。ですから、すぐに成果が目に見えないことを続けるのは、それだけでとても難しく大変なのです。

画家であるフレデリック・バックは「この物語は、献身的に働くすべての人々に捧げられるとともに自分の手で何をしたらよいかわからない人や、絶望の淵にある人には心強い激励となるでしょう」というのコメントを記しています。この文がこの絵本の性格を端的に表しているのではないでしょうか。

１９８９年の初版からじつに６０刷を数える息の長い絵本であり、第１３回絵本にっぽん賞特別賞を受賞し、同名の短編映画は１９８７年アカデミー賞短編映画賞も受賞した名作中の名作です。

学校のいろいろな樹木の苗を子どもたちに分けたことから、『木を植えた男』という絵本に触れましたが、この本から、本当に世を変えるのは権力や富ではなく、粘り強く、無私な行為であると、改めて感じました。そんな思いを持ちつつ、分けた樹木の苗が、子どもたちとともに大きく育っていくことを期待したいものです。何十年かした後は子どもも苗もどうなっているでしょうか。